

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：23201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20028

研究課題名（和文）日本人英語学習者を対象にした自然な非流暢発話の指導

研究課題名（英文）Instruction on natural speech disfluencies for Japanese learners of English

研究代表者

モクタリ 明子 (Mokhtari, Akiko)

富山県立大学・工学部・講師

研究者番号：90963413

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、13名の日本人英語学習者を対象に、英語らしく言い淀む方法を指導し、それが聞き手の評価に与える影響を調査した。学習者は、5回に渡って英会話音声録音を行った。研究目的は2回目の録音開始前に明かされた。2-4回目の録音にて、英語らしく言い淀む方法の指導が行われ、5回目の録音でその成果が試された。その後、4名の英語教員が、1回目と5回目の録音音声を聞き、5段階スケールで評価を行った。その結果、1回目より5回目の評価が高かった学習者には、日本語による言い淀みが大きく減少していたケースがあった。また、全ての学習者が、1回目より5回目において、英語式の言い淀み方を多く使用していたことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日常会話は、言い淀みに満ちている。母語話者でさえそうであるのだから、学習者の発話にいたっては尚更である。しかしながら、学習者が、どのように学習言語で言い淀むかを学ぶ機会は限られている。本研究は、「完璧に話す」のではなく「自然に言い淀みながら発話を維持する」という現実のコミュニケーションに即した指導を行い、その評価を示したことに学術的意義があると考え、教科書・教室の中でのこととは、現実のこととはの間には隔りがある。本研究における単語・文法の習得とは異なる、よりコミュニケーション視点からの指導は、学習者にとってより実践的であり、その点に社会的意義があると考え。

研究成果の概要（英文）：In this study, 13 Japanese learners of English were taught how to be disfluent in an English-like manner, and the effect of this on listeners' evaluations was investigated. First, five sessions of learners' English speech were recorded. The purpose of the study was stated before the start of the second recording. In the second to fourth recordings, the learners were trained to be disfluent in a natural English way, and the results were tested in the fifth recording session. Four English teachers (native English speakers) then listened to the learners' first and fifth recordings and rated them on a five-point scale. The results showed that the learners who were evaluated higher in the fifth recording than in the first recording showed a drastic reduction in the usage of Japanese disfluency markers in their English. It was also found that all the learners used more English-style disfluencies in the fifth session than in the first.

研究分野：言語学

キーワード：非流暢性 英語学習者 コミュニケーション

## 様式 C-19、F-19-1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日常コミュニケーションは、相手とのやり取りの中で瞬時に繰り広げられるものである故、非流暢になりがちである。また、一般的に学習者の発話は、母語話者の発話に比べ、流暢さに欠ける。上級学習者の会話には、学習言語らしい言い淀み方が観察されるが (モクタリ (中川)・林・定延 2004)、それらは学習言語に多く触れる中で試行錯誤し、長時間にわたる努力の結果、自然な言い淀み方を身につけている可能性が高い。言い淀まずに話すことは不可能であるにも関わらず、従来の日本語教育が流暢な日本語を話させることを目的としてきたことが指摘されている (定延 2024)。英語教育においても英語でどのように自然に言い淀めばよいかについての指導は積極的に行われてこなかった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、より円滑な英語によるコミュニケーションを目指すために、英語における自然な言い淀み方を、学習者が短期間で意識的に習得することが可能か否か、またそれが聞き手による評価にどのような影響を与えるかを調査することであった。

### 3. 研究の方法

研究は次の手順で行った。

(1) 英語母語話者 4 名および英語母語話者に準ずる英語力を持つ非母語話者 1 名の英語発話を録音し、どのような非流暢性マーカーが使用されているかを観察した。その結果、話し始めの “So”、発話をつなぐ “um”、“and (and then)”、“well”、起こっている事態を伝える “I forgot”、“I can’t remember”、“How do I say?”、“What’s the word?” などが度々使用されていた。それらの生起位置や生起環境を整理し、音声サンプルとともにスライドにまとめた。

(2) 日本人英語学習者 13 名 (大学学部生) を集め、5 回に渡って英語発話の録音を行った。タスクは、1 回の録音につき、「3 つの英語の質問にこたえる」(タスク 1-3)、「4 コマ漫画を説明する」(タスク 4)、「童話を要約する」(タスク 5) の 3 種類であった。タスクの素材は、毎回異なるものを使用した。初回録音音声进行分析し、学習者が用いた非流暢性マーカーを洗い出した。2 回目の録音開始前に、研究目的を明かし、英語での言い淀み方について (1) のスライドを用いて説明を行った。その際、初回録音の書き起こしを確認しながら、どのように日本語の言い淀みを英語に置き換えるかを指導した。2 回目から 4 回目の録音においては、タスクをこなす中で、ことばにつまんだ際には、英語式に言い淀めるよう、適切な英語の非流暢性マーカーをパネルで提示し、トレーニングを行った。5 回目の録音は、トレーニングの成果を試すため、パネル提示を行わず、1 回目と同じ条件で行った。

(3) 学習者の 1 回目と 5 回目の録音を、4 名の英語教員 (英語母語話者) に聞かせ、1 から 5 のスケールで評価してもらった。具体的には、各学習者の 1 回目・5 回目のタスク 2 およびタスク 3 の 4 つの録音音声 (それぞれ 1~2 分程度) をランダムイズし評価者に聞いてもらった。評価の比較は、学習者間ではなく学習者内で行うよう指示を与えた。なお、録音および評価は、2 期に分けて行われた (第 1 期: 2022 年 12 月から 2023 年 2 月、第 2 期: 2023 年 10 月から同年 12 月)。7 名の学習者が第 1 期の録音に参加し、6 名の学習者が第 2 期の録音に参加した。

### 4. 研究成果

(1) 1 回目と 5 回目の評価結果を表 1 に示す。学習者 A による 1 回目録音音声の評価平均点は 1.33 であった。同じ学習者の 5 回目録音音声の評価平均点は 2.16 であった。この学習者は、1 回目の録音と比較すると、5 回目の録音の評価が 0.83 ポイント上昇していた。B~M は、残りの学習者 12 名の評価点である。1 回目より 5 回目の評価点が低かった学習者が 3 名 (F・H・L) おり、また評価点に変化が見られなかった学習者も 2 名 (D・I) いたが、学習者全員の評価平均点は 1 回目より 5 回目の方が 0.21 ポイント上昇していた。

表 1 学習者英語録音音声の評価結果

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	Mean
1 <sup>st</sup> Rec	1.33	2.33	1.83	1.25	2.00	2.87	2.12	3.20	2.20	2.20	2.50	3.30	1.40	2.19
5 <sup>th</sup> Rec	2.16	2.66	2.16	1.25	2.12	2.50	3.25	2.80	2.20	2.50	2.90	3.00	2.20	2.40

0.83 ↑ 0.33 ↑ 0.33 ↑ 0.00 0.12 ↑ 0.37 ↓ 1.13 ↑ 0.40 ↓ 0.00 0.30 ↑ 0.40 ↑ 0.30 ↓ 0.80 ↑ 0.21 ↑

(2) 1回目と5回目の録音音声において観察された5秒以上のポーズの生起回数を表2に示す。1回目・5回目ともに全く観察されない学習者が5名(D・J・K・L・M)、変化なしが2名(E・I)、残りの6名(A・B・C・F・G・H)は1回目より5回目が増加していた。1回目より5回目の方が5秒以上のポーズが多く観察された学習者はいなかった。ことばが出てこない際に観察される不自然な間が、トレーニングの結果、英語非流暢性マーカーの使用により回避できている事例が観察された。

表2 5秒以上のポーズの生起回数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	Mean
1 <sup>st</sup> Rec	4	3	1	0	4	4	2	1	1	0	0	0	0	1.54
5 <sup>th</sup> Rec	0	0	0	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0.38

(3) 1回目と5回目の録音音声において観察された日本語の非流暢性マーカーの生起回数を表3に示す。1回目・5回目ともに全く観察されない学習者が2名(E・F)いたが、残り11名の学習者については、1回目より5回目の方が減少していた。

表3 日本語非流暢性マーカーの生起回数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	Mean
1 <sup>st</sup> Rec	2	2	6	31	0	0	19	20	4	31	8	3	47	13.3
5 <sup>th</sup> Rec	0	0	0	0	0	0	2	4	2	9	2	0	4	1.77

(4) 1回目と5回目の録音音声において観察された英語の非流暢性マーカーの生起回数を表4に示す。全ての学習者において、1回目より5回目の方が多く観察された。

表4 英語非流暢性マーカーの生起回数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	Mean
1 <sup>st</sup> Rec	0	0	0	0	0	3	0	9	0	1	0	0	0	1
5 <sup>th</sup> Rec	5	2	3	7	3	4	23	10	1	2	9	3	1	5.62

1回目より5回目の録音音声において、多くの学習者の日本語非流暢性マーカーの使用が減少し(3)、全ての学習者の英語非流暢性マーカーの使用が増加したこと(4)から、学習言語における言い淀み方を短期間で意識的に習得することが可能であることが示唆された。1回目より5回目の録音音声において、日本語非流暢性マーカーの使用が大きく減少し、英語非流暢性マーカーの使用が増加した学習者Gが、英語教員による評価が最も上がっていた。また、評価が0.8ポイント上昇した学習者Mは、日本語非流暢性マーカーの使用が最も減少していた。一方、日本語非流暢性マーカーの使用が大きく減少し、英語非流暢性マーカーの使用が増加していた学習者Dの評価は、1回目と5回目で変化がなかった。このことから、非流暢性以外の要素—例えば録音への慣れや、質問(タスク)へのこたえやすさなど—が評価の変化に関連している可能性も考えられる。また、「えー」や「あー」などのフィラーについては、日本語なのか英語なのか判然としないものもあった。これらの点を考慮に入れ、現実のコミュニケーションに即した指導を確立させていく必要がある。

<引用文献>

- ① モクタリ(中川)明子、林良子、定延利之、中国語母語話者による母語・非母語における非流暢性の考察、日本音声学会第18回全国大会予稿集、2004、71-76
- ② 定延利之、発話の(非)流暢性への総合的なアプローチ、定延利之、丸山岳彦、遠藤智子、船橋瑞貴、林良子、モクタリ明子(編)、流暢性と非流暢性、ひつじ書房、2024、3-23

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Akiko Mokhtari
2. 発表標題 Teaching how to be disfluent in learning language
3. 学会等名 Nara JALT MyShare Event 2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------